2019.10.27　年間第３０主日

優等生の祈り、道をふみはずした者の祈り

ルカ 18 章 9-14 節

（そのとき）自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して（も）、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

説教

以前のことですが、ある人を見かけました。彼はカラのかばんをコンクリの地面におき、自分の頭を激しく何度も何度も打ち付けていました。友人と二人で見かけたのですが、声をかけようにも慟哭の激しさに圧倒されて遠くから見守るでもなくただ見ていました。最終レースが終わった競馬場の帰り道での出来事でした。その日、彼は全財産をカバンに詰め込み出かけ、賭けに負け絶望していたとわたしたちは想像しました。

> **徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』**（ルカ 18:13）

この徴税人のたとえを読むと夕焼けに染まった東京競馬場西口ゲートの彼を思い出します。彼には祈る神があったのだろうか、その神は彼を救ったのだろうかといつも自問します。

イエスさまのたとえでは鼻持ちならない優等生のパリサイ人の祈りは受け入

れず、罪びとの徴税人の祈りが義とされたとあります。パリサイ人はへりくだった振りをしているだけですが、徴税人は本気で悔やんでいる、とイエスさまはたとえを通しておっしゃています。
神を信じる人でも神の御前ではへりくだり、人間を相手にすると態度が変わる人は普通にいるような気がします。これはこの世に生きている限り避けることのできないの一つです。
善いことだったのか、悪いことだったのか、正しかったのか、それとも誤っていたのか。毎日、毎回、自省して、誤りを正し、悪を避ける人でも、善悪の基準がなければ実行できません。パリサイ人は律法を基準に自らを律していました。しかし、神はパリサイ人を受け入れません。その一方、よい悪いを考えることなく、ただ生きている人を神がお赦しになるとも思えません。
地上に生きるわたしたちはこの呪縛を受け入れた上で、福音のたとえに出てくる徴税人のように「胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』」と祈ることが義への道だと語りかけてくださいます。
きょうの福音はこう結ばれています。

だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。（ルカ 18:14）